横浜銀行の店舗の歴史

概説

当行は、平成 22（2010）年 12 月末現在、神奈川県内を中心に、国内に 204 か店の有人店舗を設置している。

昭和 20（1945）年以前から現在まで継続する店舗は 53 か店であるが、このうち前身銀行からの歴史を受け継ぐ店舗が 40 か店ある。これらの店舗は、その地域に初めて誕生した銀行の本支店を継承しているものが多く、明治時代から 100 年を超える歴史をもつ店舗が多数ある。また、戦後に新設した店舗も、その地域で初の銀行店舗であるものが少なくない。

横浜銀行の店舗の歴史の構成（現在の行政区画）と昭和 20（1945）年以前から現在まで継続する店舗（53 か店）

No.	「横浜銀行の店舗の歴史」の構成（現在の行政区画）	現存する店舗	
		前身銀行からの継承店舗 40 か店	昭和 20（1945）年までに新設（配置転換含む）
01	横浜市	本店営業部、元町、阪東橋、伊勢佐木町、保土ヶ谷、戸塚、横浜駅前（旧神奈川）、中山、妙蓮寺	磯子、杉田、金沢、鶴見、鶴見西口（旧豊岡）、六角橋、中央市場
02	川崎市	川崎	武蔵小杉（旧丸子）、溝口
03	鎌倉市・逗子市・葉山町	鎌倉、大船、逗子、葉山	
04	横須賀市・三浦市	横須賀（旧若松町）、追浜、浦賀、三崎	
05	町田市・多摩市・相模原市・大和市・座間市・海老名市・綾瀬市	上溝、橋本、町田	渕野辺（旧相模原）、中野
06	藤沢市東部	藤沢、片瀬、長後	
07	平塚市・中郡・茅ヶ崎市・藤沢市西部・寒川町	茅ヶ崎、平塚、大磯、二宮	辻堂、（大磯）
08	厚木市・愛川町・伊勢原市・秦野市	厚木、伊勢原、秦野	
09	小田原市	小田原、国府津、下曽我	
10	南足柄市・足柄上郡・足柄下郡・熱海市	松田、山北、大雄山	湯河原
11	群馬県	前橋、高崎	

上記のほか、東京支店が前身銀行からの継承店舗である。

昭和 20（1945）年までに新設した店舗のうち、
青文字の 8 か店は、当行（横浜興信銀行）が独自に新設
赤文字の 5 か店（および大磯支店）は、当行（横浜興信銀行）店舗の配置転換により新設

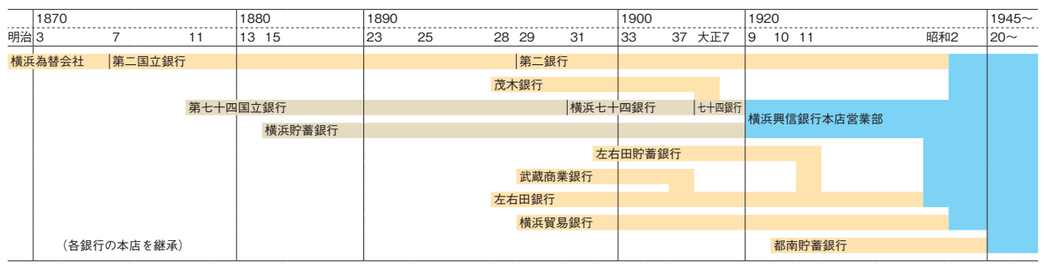
「横浜銀行の店舗の歴史」では、神奈川県内（町田市などを含む）を 10 地域に分け、これに群馬県を加えた、計 11 の地域について、地域別に、地域の発展の状況にふれ、当行が新設したものも含め、店舗の開設、廃止の歴史を紹介している。

その中で、前身銀行から受け継いだ 40 か店について、その起源をたどっている。

起源をたどっていくにあたり、直接店舗（建物・場所）を継承したものだけでなく、「店舗は継承していないが、営業（預貸金など）を継承した」というケースもあるため、この双方に目を向けた。

本店営業部を例に、具体的にみていくと、昭和 55（1980）年に刊行した「横浜銀行六十年史」の「営業店の沿革」では、本店営業部は、「大 9.12.25　旧七十四銀行本店の店舗を使用し、横浜市南仲通 2 丁目 20 番地で営業開始」から始まるが、本書では、さらに時代をさかのぼり、営業の継承にも注目して、起源をたどった。

（例）本店営業部の歴史



本店営業部が直接店舗（建物・場所）を継承したのは、七十四（しちじゅうし）銀行と横浜貯蓄銀行の本店であるが、その開設は、明治 11（1878）年の第七十四（しちじゅうし）国立銀行本店の開店にさかのぼる。また、営業（預貸金など）の継承に目を向けると、昭和 3（1928）年に第二銀行本店の営業を継承しており、第二銀行は明治 2（1869）年開業の横浜為替会社にまでさかのぼることができる。本店営業部は、この他にも、左右田（そうだ）銀行・横浜貿易銀行・都南（となん）貯蓄銀行の各本店の営業を継承している。

01 横浜市内の店舗の歴史

横浜市

横浜為替会社から141年の歴史をもつ本店営業部と七十四銀行・左右田銀行・戸塚銀行・瀬谷銀行等を継承する店舗そして、戦前・戦後に新設された大多数の店舗

開港で一変した寒村・横浜村

かつて、横浜港周辺の地形は、現在の元町・中華街駅付近を付け根として桜木町駅付近まで、本町通りを背骨とする細長い半島が北西に向かってせり出し、その南西には釣鐘型の入江が大きく開けていた。野毛山の下まで海であり、伊勢佐木町や横浜公園一帯は入江の中、蒔田付近まで沼地が続いていた。この半島一帯が「横浜村」だった。

江戸時代から入江の埋立ては進んでいたものの、開港前夜の横浜村は、戸数約100戸の寒村に過ぎず、「苫屋のけむり ちらりほらりと立てりしところ」(横浜市歌)の通りだった。

安政5(1858)年、徳川幕府は米国など5か国と修好通商条約を結び、わが国の鎖国政策に終止符が打たれるが、開国の窓口のひとつに選ばれたのが横浜だった。条約では「神奈川開港」と謳っているが、長崎のような出島貿易を想定した幕府は、東海道筋にある神奈川では取締りに不便であることから、横浜を神奈川の一部として開港した。廃藩置県で県名を神奈川とし、横浜をその一部としたことも、横浜開港と整合させるためであったと考えられている。

開港を機に、横浜は一変する。現在の山下町に外国人居留地が設けられ、全国から生糸、茶などの売込商人が集まり、貿易港横浜はにわかに活況を呈する。 そして、明治22(1889)年、全国で最初に誕生した31市のひとつ、神奈川県内唯一の市として、横浜市が誕生することになる。この時の横浜市は、横浜港を中心とする面積わずか5.4㎢の範囲にすぎなかったが、人口はすでに11万人を超えていた。その後、6度の市域拡張を重ね、昭和14(1939)年にほぼ現在の市域となり、横浜市の人口は現在360万人を超えている。

戦前に39行もの銀行本店が誕生

戦前、現在の横浜市域には、県内全80行のほぼ半数にあたる39行の銀行が誕生している。このうち12行が、当行の前身となっている。このほか4行が他行に継承されたが、実に23行もが廃業している。県内の廃業行は33行だが、横浜23行と川崎7行とで30行を占める。開港地横浜でのビジネスが、いかにリスクの大きなものであったかを物語っている。

＜当行の前身となる銀行(設立年順)＞

横浜為替会社⇒第二国立銀行⇒第二銀行

明治2(1869)年、全国で8社設立された為替会社(日本で最初の会社組織の金融機関)のひとつ。7年に第二国立銀行に組織変更し、29年に第二銀行となり、生糸売込商・原家の機関銀行としての性格を強めていく。昭和3(1928)年、横浜興信銀行に営業譲渡。

第七十四国立銀行⇒横浜七十四銀行⇒七十四銀行

明治11(1878)年設立。31年に横浜七十四銀行となった。七十四銀行に改称後、茂木銀行と合併し、生糸売込商・茂木家の機関銀行となる。大正9(1920)年に経営破綻・休業し、新設の横浜興信銀行に整理委託。

横浜貯蓄銀行

明治15(1882)年設立。七十四銀行関連の貯蓄銀行。大正9(1920)年に七十四銀行とともに経営破綻・休業し、新設の横浜興信銀行に整理委託。

左右田銀行

明治28(1895)年設立。両替店を営んでいた左右田家が設立。横浜市内のほか東京・大阪・名古屋・四日市にも支店を設置していた。昭和2(1927)年の休業を経て横浜興信銀行に営業譲渡。

茂木銀行⇒七十四銀行

明治28(1895)年設立。大正7(1918)年に七十四銀行と合併。

武蔵商業銀行⇒左右田銀行

明治29(1896)年設立。37年に左右田銀行と合同。

横浜貿易銀行

明治29(1896)年設立。昭和3(1928)年に横浜興信銀行に営業譲渡。

左右田貯蓄銀行⇒左右田銀行

明治32(1899)年設立。左右田銀行系の貯蓄銀行。大正11(1922)年に左右田銀行と合同し、新・左右田銀行を設立。

戸塚銀行⇒関東興信銀行

明治32(1899)年、当時鎌倉郡役所が置かれていた戸塚に設立された。保土ヶ谷、長後、田浦、神奈川などに支店を設置。昭和3(1928)年、関東興信銀行に営業譲渡し、7年、関東興信銀行は横浜興信銀行と合併。

元町貯蓄銀行⇒元町銀行

明治33(1900)年設立。元町銀行を経て、昭和3(1928)年、横浜興信銀行に営業譲渡。

瀬谷銀行⇒鎌倉銀行

明治40(1907)年、瀬谷に設立された。中山、橋本、上溝などに支店を設置。昭和10(1935)年、鎌倉銀行に営業譲渡。鎌倉銀行は16年に「六行合同」により横浜興信銀行に営業譲渡する。

都南貯蓄銀行

大正10(1921)年、県内の貯蓄銀行や普通銀行が兼営していた貯蓄部を統合して設立。昭和20(1945)年、横浜興信銀行に営業譲渡。

＜他行に継承された銀行(設立年順)＞

神奈川銀行*1　保善銀行、安田銀行、富士銀行を経てみずほ銀行へ
横浜中央銀行　安田貯蓄銀行、日本貯蓄銀行、協和銀行などを経てりそな銀行へ
商業貯蓄銀行(神奈川貯蓄銀行と改称)　同上
渡辺銀行　第一銀行、第一勧業銀行を経てみずほ銀行へ

＊1　現在の神奈川銀行(旧・神奈川相互銀行)とは別の銀行。

＜廃業(または、転出し現在までに廃業)した銀行(設立年順)＞

誠資社(誠資銀行と改称)、第百三十二国立銀行(保土ヶ谷)、金叶貯蓄銀行(平沼貯蓄銀行と改称)、横浜銀行*2、横浜若尾銀行、横浜商業銀行、横浜起業銀行、横浜蚕糸銀行、武蔵貯蓄銀行、田村割引銀行、東洋貯金銀行、戸部貯蓄銀行(戸部銀行と改称)、野毛貯蓄銀行(養老貯蓄銀行⇒横須賀貯蓄銀行⇒横浜銀行*3と改称)、武相貯蓄銀行、横浜実業銀行、横浜実業貯蓄銀行、横浜中央貯蓄銀行(横浜商工銀行⇒上信銀行と改称)、相生銀行、工商貯金銀行(横浜貯蔵銀行⇒石井貯蓄銀行⇒昌栄貯蓄銀行と改称)、東陽銀行、平沼銀行、管理銀行、岡丸銀行

＊2.3　現在の当行とは別に、「横浜銀行」と称した銀行が過去に2行存在した。

相次いだ銀行支店の設置

明治初期から、第一・三井・第百(のちに三菱と合併)・住友など、東京・大阪に本店を置く大手銀行が支店展開を開始し、横浜に本店を置く各行も、市内に複数の支店を設置した。しかし、市外への支店設置はきわめて少なく、市外に本店をもつ銀行が横浜市に支店を展開するケースもほぼ見られなかった。開港により“外国との玄関口”となった横浜は、独立した経済圏を形成しており、県内の他地域との相互関連性が低かったことがわかる。

また、横浜市には、慶応2(1866)年に設置された香港上海銀行横浜支店など、欧米系の外国銀行支店も複数設置されていた。さらに、昭和13(1938)年以降、鶴見区への東京本店の銀行の出店が相次いだ。軍需に結びついた金属・機械器具・化学工業などの工場が次々と鶴見区に進出し、東京本店の銀行がその金融を支えていたことがわかる。

前身行から継承し、現在も営業を継続する当行店舗

本店営業部

本店営業部が店舗(建物・場所)を直接継承したのは、七十四銀行とその関連会社・横浜貯蓄銀行の本店であるが、その開設は、明治11(1978)年の第七十四国立銀行本店の開店にさかのぼる。また、営業(預貸金など)の継承に目を向けると、昭和3(1928)年に第二銀行本

当行店舗の設置時期

現在の「区」	前身行からの継承店舗	S20までに新設	S20までに廃止	S20店舗数	S20年代新設	S30年代新設	S40年代新設	S50年代新設	S60以降新設	戦後廃止	店舗数
中	本店営業部 元町 野毛町 伊勢佐木町 寿町 (当初長者町) 阪東橋 (当初長島町)	千代崎町 旧本牧	寿町(当初長者町) 千代崎町 旧本牧	5		本牧 県庁	横浜市庁	横浜市立大学医学部病院(出)	新本牧 関内	野毛町 横浜市立大学医学部病院(出) <本店転出>	8
西		戸部 浅間町	浅間町	1	藤棚	横浜駅前(神奈川が移転・改称)		横浜東口	横浜シティ 本店営業部(中区より) そごう横浜店(出) みなとみらい	戸部 横浜東口 横浜シティ	5
神奈川	神奈川	六角橋(当初斎藤分) 子安 中央市場		4	大口	反町		本場内(出)	新子安	子安 <神奈川転出>	6
磯子		磯子 杉田		2		汐見台	洋光台		磯子駅前	汐見台	4
鶴見		潮田 鶴見 鶴見西口 (当初豊岡)	潮田	2	生麦					生麦	2
南				0	弘明寺			六ッ川			2
港南				0	上大岡		上永谷 野庭 港南台				4
保土ヶ谷	保土ヶ谷 宮田町		宮田町	1		明神台団地(出)	和田町 西谷 境木(当初東戸塚)	新桜ヶ丘(出)	YBP(出)	明神台団地(出) YBP(出) 新桜ヶ丘(出)	4
旭				0		希望ケ丘 鶴ヶ峯 万騎ヶ原団地(出)	二俣川 左近山	白根 横浜若葉台 今宿(出)		万騎ヶ原団地(出) 今宿(出)	6
金沢		金沢		1			南部市場 能見台駅前 (当初谷津坂)	金沢シーサイド 六浦(出) 金沢産業センター	金沢文庫 市大附属病院(出)	市大附属病院(出) 六浦(出)	6
戸塚	戸塚			1				戸塚南(当初ドリームランド(出)) 東戸塚駅前 新戸塚			4
瀬谷				0		三ツ境	瀬谷				2
栄				0			公田 本郷台	湘南桂台		公田	2
泉				0			上飯田(出) 和泉	いずみ野	緑園都市 ダイクマいずみ中央店(出)	上飯田(出) ダイクマいずみ中央店(出)	3
港北	妙蓮寺			1	綱島	日吉 菊名 南日吉 (当初南日吉団地(出))	大倉山	新横浜	新羽 高田	南日吉 (当初南日吉団地(出))	8
緑	中山			1		長津田	竹山 (当初鴨居)	鴨居駅前 霧が丘(出) 十日市場		霧が丘(出)	5
青葉				0			たまプラーザ	青葉台 市が尾 あざみ野	藤が丘		5
都筑				0					港北ニュータウン南 港北ニュータウン北 仲町台 北山田		4
店舗数	12	13	-6	19	6	14	20	23	20	-22	80

昭和20(1945)年に戦災焼失により閉店し、昭和22(1947)年に再開した野毛町・長島町(現・阪東橋)の2か店は、継続して設置されていたものとして扱っている。

店の営業を継承しており、第二銀行は明治２(1869)年開業の横浜為替会社にまでさかのぼることができる。本店営業部は、このほかにも、左右田銀行・横浜貿易銀行・都南貯蓄銀行の各本店の営業を継承している。

元町支店

横浜七十四銀行元町支店を起源とする七十四銀行元町支店を継承して誕生(元町二丁目)。このほか、元町貯蓄銀行を起源とする元町銀行の営業を継承。昭和20(1945)年の横浜大空襲で焼失後、現在地(元町五丁目)に移転。

阪東橋支店(当初 長島町支店)

左右田銀行長島町支店を継承して誕生。終戦後、阪東橋支店に改称。現在も左右田銀行長島町支店時代と同一地で営業。

伊勢佐木町支店

横浜七十四銀行伊勢佐木町支店を起源とする七十四銀行伊勢佐木町支店を継承して誕生。このほか、すぐ近くにあった左右田銀行松ヶ枝町支店の営業を継承。

横浜駅前支店(当初 神奈川支店)

横浜七十四銀行神奈川支店を起源とする七十四銀行神奈川支店を継承して誕生。左右田銀行との合同時に、左右田銀行神奈川支店所在地に移転。戸塚銀行が関東興信銀行と合同した際、戸塚銀行神奈川支店の預金を横浜興信銀行(当行)神奈川支店が継承。

京急・神奈川駅の近くにあった神奈川支店が、横浜駅西口に移転、横浜駅前支店と改称するのは、当行が横浜銀行に行名変更した昭和32(1957)年。高島屋ストア(横浜高島屋(現・高島屋横浜店)の前身)、相鉄文化会館のオープンなど、相模鉄道を中心として、それまで閑散としていた西口の開発がようやく本格化する時期だった。

保土ヶ谷支店と、6か月間だけ存在した宮田町支店

戸塚銀行保土ヶ谷支店を起源とする関東興信銀行横浜支店を継承して誕生。昭和16(1941)年の「六行合同」時には、瀬谷銀行保土ヶ谷支店を起源とする鎌倉銀行保土ヶ谷支店を継承して、宮田町支店が誕生するが、6か月で保土ヶ谷支店に統合された。

戸塚支店

戸塚銀行本店を起源とする関東興信銀行戸塚支店を継承して誕生。

中山支店

瀬谷銀行中山支店を起源とする鎌倉銀行中山支店を継承して誕生。

妙蓮寺支店

都南貯蓄銀行港北支店を継承して誕生。

なお、前身行から継承したが現在までに廃止された店舗は、次の2か店である。

寿町支店(当初 長者町支店)

七十四銀行長者町支店を継承して誕生。左右田銀行寿町支店所在地に移転し、寿町支店と改称。昭和20(1945)年の横浜大空襲で焼失、廃止。

野毛町支店

横浜七十四銀行野毛町支店を起源とする七十四銀行野毛町支店を継承して誕生。左右田銀行野毛町支店の営業を継承。昭和55(1980)年廃止。

戦後、地域の発展に対応した店舗展開

横浜興信銀行が、戦前に前身行からの継承以外で独自に横浜市内に新設した店舗は、千代崎町、戸部、鶴見、斎藤分(現・六角橋)、磯子、子安、中央市場、潮田、浅間町、杉田、(旧)本牧、金沢、豊岡(現・鶴見西口)――の13か店である(設置年順)。このうち千代崎町、潮田、浅間町、(旧)本牧の4か店は、昭和20(1945)年の横浜大空襲によって焼失・廃止し、戸部および子安の2か店は、平成に入ってからそれぞれ藤棚支店・大口支店に統合されている。

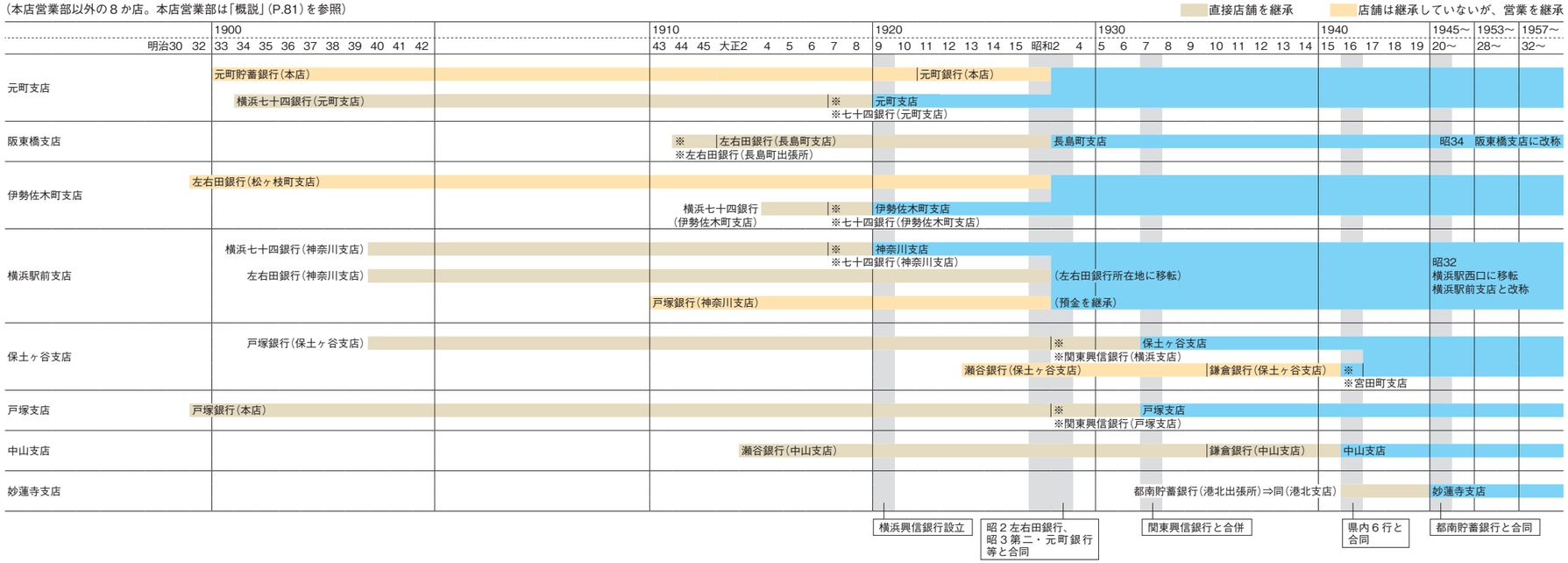
昭和16(1941)年の「六行合同」以前には、前身行からの継承以外による横浜より西への店舗新設は1店舗もなかった。藤沢に本店を置く関東興信銀行との合併が既定路線であったことから、横浜より西側は同行との合併時に店舗を継承することとし、店舗新設はもっぱら横浜を中心としておこなうことになっていたのである。

終戦時に19か店だった当行の横浜市内店舗は、現在では80か店に達する。終戦時に当行店舗のなかった区のうち、現在の(以下同じ)南区・港南区には昭和20年代から、旭区・瀬谷区には昭和30年代から、泉区・栄区・青葉区には昭和40年代から出店が始まる。平成に入ってから、都筑区に初の当行店舗が誕生する。当行は地域の発展に対応して店舗展開をおこなってきたことがわかる。

(P.83「当行店舗の設置時期」参照)

関東大震災後の本店再築を記念する大正13(1924)年ごろの戸塚銀行のチラシ(横浜市中央図書館所蔵)と、昭和35(1960)年の当行戸塚支店
チラシに描かれた 建物は昭和50(1975)年まで使用されていた。

前身行から継承し、現在も営業を継続する当行店舗
(本店営業部以外の8か店。本店営業部は「概説」(P.81)を参照)



02 地域別にみる店舗の歴史

川崎市

横浜七十四銀行からの歴史をもつ川崎支店と
戦後に地域の発展にともなって新設された大多数の店舗

東京・大阪本店銀行が続々と支店を設置

戦前には、現在の川崎市域に４行の銀行本店が誕生し、また、４行が東京から本店を移転させている。このうち、大師銀行は野村銀行（大和銀行を経て現在のりそな銀行）に継承されるが、他７行すべてが、継承されることなく廃業している。

明治 33（1900）年設立の石橋銀行は、中原村（現・中原区）に本店を置き、支店を現在の新羽、荏田、登戸、宮前、生麦という広範囲に設置していたが、昭和３（1928）年に廃業した。また、支店設置に関しては、のちに都市銀行となる東京・大阪本店の銀行が、昭和 10 年代に、川崎駅周辺に続々と支店を開設したことが特徴的である。

終戦時の川崎市域内店舗

終戦時、現在の川崎市域内の横浜興信銀行（当行）の店舗は、川崎・溝口・丸子（昭和 37（1962）年移転・改称し武蔵小杉支店となる）の３か店だった。 川崎支店は、大正５（1916）年に横浜七十四銀行川崎支店として開設され、７年に改称、茂木銀行を合併した七十四銀行川崎支店を継承して、９年の横浜興信銀行設立時に誕生した。

七十四銀行の経営母体である茂木家は、茂木合名会社を設立し、生糸売込・輸出等を中心に事業を展開していたが、第一次世界大戦中の好況時に、雑貨・機械・鉱山などにも事業・取扱商品を大きく拡大し、七十四銀行は、茂木合名の資金需要に応える「機関銀行」となった。しかし、９年に大戦後の反動恐慌の影響で、経営破綻・休業を余儀なくされ、その整理を新設の横浜興信銀行（当行）が受託、川崎支店も横浜興信銀行川崎支店として営業が再開されることになる。

12 年９月１日の関東大震災により、当行は横浜市内全店および東京支店を焼失したが、川崎支店は高崎支店とともに焼失を免れ、横浜市内店舗に先立ち、９月 14 日から営業を再開、横浜市内店舗の再開準備も川崎支店でおこなわれた。しかし、昭和 20（1945）年４月 15 日の川崎大空襲では焼失し、以降３年間、川崎市役所内の仮設営業所での営業を余儀なくされた。

また、溝口支店は、「六行合同」時に店舗重複が発生した平塚地区から、秦野銀行平塚支店を継承した平塚八幡前支店の配置転換によって 17 年に新設、武蔵小杉支店の前身である丸子支店は 18 年に新設された。

戦前にはこのほか、昭和２（1927）年に渡田出張所が開設されたが、翌年に廃止。昭和 10 年代に新設された新川通支店、御幸特別支店は川崎大空襲により焼失し、再開されることなく廃止となった。

地域の発展に対応した積極的な店舗展開

戦後の急激な地域の発展に対応して、当行も店舗を展開していくことになる。終戦時に３か店だった当行店舗は、現在、34 か店に達する。

このうち、日吉（横浜市）から武蔵小杉・鹿島田にかけては、昭和 30 年代に、まず、移動出張所（愛称：グリーンバス）による準備期間を経て、店舗を開設するというステップがとられた。（横浜駅前支店を拠点に相鉄線沿線を巡回するコースもあった。）

＜昭和 20 年代　２か店＞

登戸支店
昭和 22（1947）年、現多摩区域に初めての拠点として出張所開設、25 年 12 月 16 日の創立 30 周年記念日に他の９出張所とともに支店昇格。

大島支店
昭和 27（1952）年、川崎大島支店として新設、６年後に改称。

＜昭和 30 年代　４か店＞

御幸支店
昭和 31（1956）年新設。旧藤沢支店の代替として出店。

大師支店
昭和 34（1959）年新設。

百合ヶ丘支店
昭和 38（1963）年新設。現麻生区域に初の店舗。

鹿島田支店
昭和 38（1963）年新設。グリーンバス巡回地への出店。

＜昭和 40 年代　３か店＞

元住吉支店
昭和 40（1965）年新設。グリーンバス巡回地への出店。

新城支店
昭和 40（1965）年新設。

稲田堤支店
昭和 45（1970）年新設。

＜昭和 50 年代　６か店＞

読売ランド駅前支店
昭和 50（1975）年新設。

川崎市役所出張所
昭和 52（1977）年新設。

鷺沼支店
昭和 53（1978）年新設。現宮前区域に初の店舗。

柿生支店
昭和 57（1982）年新設。

川崎北部市場支店
昭和 57（1982）年新設。

生田支店
昭和 59（1984）年新設。

＜昭和 60 年代以降　５か店＞

新百合ヶ丘支店
平成２（1990）年新設。

川崎南部市場出張所
平成５（1993）年新設。

王禅寺中央出張所
平成 14（2002）年新設。昭和 56（1981）年に開設した王禅寺（出）を平成９（1997）年に無人化していたが、再度出店。

宮前平支店
平成 15（2003）年に個人特化型店舗として新設。

川崎西口支店
平成 18（2006）年、東芝川崎事業所（旧堀川町工場）跡地に出店したラゾーナ川崎プラザ内に新設。

＜戦後に新設し、廃止した店舗＞

京王若葉台出張所
昭和 54（1979）年に京王相模原線若葉台駅前に出店するも、61 年廃止。

王禅寺出張所
昭和 56（1981）年開設、平成９（1997）年に無人化。なお、平成 14（2002）年に王禅寺中央出張所を再度出店。

梶が谷出張所
昭和 59（1984）年に梶が谷駅前に新設されたが、平成元（1989）年に廃止された。

川崎地下街出張所
昭和 61（1986）年に川崎地下街アゼリア開業時に新設されたが、平成６（1994）年に廃止された。

エスパ川崎店出張所
平成 12（2000）年に昭和電線電纜の川崎事業所跡地に開業したエスパ川崎店内にインストアブランチとして新設されたが、17 年に廃止された。

当行店舗の設置時期

現在の「区」	川崎	幸	中原	高津	宮前	多摩	麻生	店舗数
大正以前からの継承店舗	川崎							1
戦中に新設（配置転換等）			武蔵小杉（旧丸子）	溝口				2
S20までに廃止	渡田（出）・新川通	旧御幸						(3)
S20年代新設	大島					登戸		2
S30年代新設	大師	御幸・鹿島田					百合ヶ丘	4
S40年代新設			新城・元住吉			稲田堤		3
S50年代新設	川崎市役所（出）				鷺沼 川崎北部市場	読売ランド駅前 生田	柿生	6
S60以降新設		川崎南部市場（出） 川崎西口			宮前平		新百合ヶ丘 王禅寺中央（出）	5
店舗数	4	4	3	1	3	4	4	23
戦後新設し廃止	川崎地下街（出） エスパ川崎店（出）			梶が谷（出）			京王若葉台（出） 王禅寺（出）	(5)

グリーンバスお目みえ
各界の注目を集めて
関東では第一号車
全行で後押し
地質はまず良好
児童作品募集
「私の夏休み」

関東地方で初の移動出張所（愛称：グリーンバス）の営業開始を伝える「浜銀ニュース」（昭和３３年８月１５日号）と田園地帯を走るグリーンバス

03 横浜銀行の店舗の歴史

鎌倉市・逗子市・葉山町

明治 30（1897）年設立の鎌倉銀行の本支店を継承する鎌倉支店・大船支店・逗子支店・葉山支店

憩いの地として名を上げた鎌倉・逗子・葉山

わが国最初の幕府が置かれた古都鎌倉は、江戸時代から観光地化が始まった。そして、明治 22（1889）年、東京・横浜と軍港・横須賀とを結ぶ横須賀線が鎌倉・逗子経由で開通したころから、別荘地・保養地・観光地として脚光を浴びるようになり、27 年には葉山に御用邸が設けられている。

鎌倉銀行が設立され、地域の中心的な銀行に

明治 30（1897）年、小町に鎌倉銀行が設立された。鎌倉・逗子・葉山地域に本店を置く唯一の銀行であった同行は、逗子・葉山・長谷・一色などに支店を設け、地域の中心的な銀行となる。このほか、日本実業銀行が、東京から横須賀に本店を移した後、一時的に本店を鎌倉に置いたが、その後、駿河銀行（現・スルガ銀行）と合同している。

関東興信銀行から店舗継承

藤沢に近い腰越には、明治 41（1908）年に、藤沢銀行と戸塚銀行がそれぞれ支店を設置している。藤沢銀行は、同じく藤沢に本店を置く相模共栄銀行、浦賀銀行と 3 行合同により関東銀行を設立するが、関東大震災の影響を受け、経営破綻・休業を余儀なくされる。県知事の要請を受けた横浜興信銀行（当行）は、関東銀行の整理に深く関与することとなり、整理銀行である関東興信銀行を設立し、横浜興信銀行初代副頭取・井坂孝がその頭取に就任、戸塚銀行も昭和 3（1928）年に、関東興信銀行と合同する。この結果、当初の藤沢銀行と戸塚銀行の腰越支店は、関東興信銀行腰越支店に統合されることとなった。また、同年、関東興信銀行は、鎌倉と大船に出張所を設置している。

整理に目処が立った 7 年、関東興信銀行は横浜興信銀行と合併し、横浜興信銀行の腰越支店・鎌倉出張所・大船出張所が誕生するが、2 年後に横浜興信銀行は大規模な店舗統廃合をおこない、この 3 か店はすべて廃止となる。

この結果、10 年の段階での鎌倉・逗子・葉山の銀行本支店は、鎌倉銀行 8 か店（本店、逗子、葉山、長谷、一色、乱橋材木座（出）、由比ヶ浜（出）、小袋谷（出））のほかは、駿河銀行鎌倉支店 1 か店のみとなり、この地域では鎌倉銀行の地盤が確固たるものとなった。

県内第 2 位の規模となった鎌倉銀行

鎌倉銀行は、昭和 3（1928）年に町田銀行、5 年に相模実業銀行（本店：厚木）と合併し、10 年には瀬谷銀行の資産・負債を継承する。町田・厚木・瀬谷はいずれも鎌倉から離れた場所に位置するが、瀬谷は、14 年に戸塚区の一部として横浜市に編入されるまで、鎌倉郡に属した。町田は鎌倉街道（鎌倉古道）で瀬谷を抜けた延長線上にあり、厚木も鎌倉街道・大山街道によって鎌倉と結ばれている――といったように、これらの地域は古くから鎌倉と強く結びついていた。

そして 16 年、鎌倉・明和・平塚江陽・相模・秦野・足柄農商の 6 行は、戦時下での「一県一行」の国策に沿う形で、横浜興信銀行と合同する（いわゆる「六行合同」）。合同直前の同年 6 月末時点で、鎌倉銀行の預金額は横浜興信銀行に次いで、神奈川県内の普通銀行中で第 2 位の地位にあった。

当行店舗の誕生

昭和 16（1941）年の「六行合同」により、横浜興信銀行（当行）は鎌倉銀行から、鎌倉・逗子・葉山において、本店を含め 8 か店を継承する。現在に至るまで、鎌倉・逗子・葉山では鎌倉銀行からの継承店舗がすべてであり、新設店舗はない。

＜現在も営業する店舗＞

鎌倉支店
明治 30（1897）年設立の鎌倉銀行本店を継承。

大船支店
昭和 3（1928）年開設の鎌倉銀行小袋谷出張所を継承して、小袋谷出張所として開業。北鎌倉出張所への名称変更、北鎌倉支店への昇格を経て、26 年に移転、大船支店となる。

逗子支店
当初は出張所として明治 33（1900）年に開設された鎌倉銀行逗子支店を継承。2 度の建て替えを経て、継承時と同じ場所で営業中。

葉山支店
明治 38（1905）年開設の鎌倉銀行葉山支店を継承。建て替えを経て、継承時と同じ場所で営業中。

＜廃止となった店舗＞

材木座支店
昭和 3（1928）年開設の鎌倉銀行乱橋材木座出張所を継承し、材木座出張所として開店。20 年に支店に昇格するも、同年、強制疎開*により廃止。

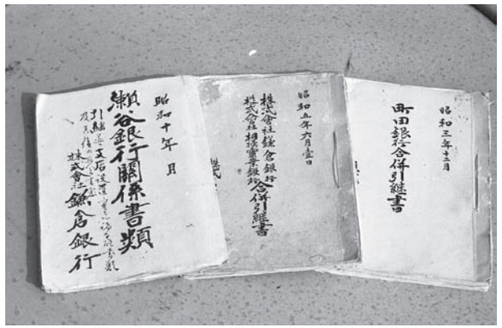
＊「強制疎開」
「疎開」というと、学童疎開をまずイメージするが、建物の「強制疎開」というものがあった。これは、太平洋戦争末期に防空対策として、行政命令により強制的におこなわれた建物の撤去のことで、建物を間引きして焼夷弾攻撃による延焼を最小限にとどめ、住民が避難できるよう、過密地帯の建物を一部取り壊す措置がとられた。横浜興信銀行（当行）の店舗で「強制疎開」の対象となったのは、材木座支店と緑町出張所（小田原市）の 2 か店だった。

由比ヶ浜出張所
昭和 3（1928）年開設の鎌倉銀行由比ヶ浜出張所を継承。昭和 20（1945）年廃止。

一色支店
大正 13（1924）年開設の鎌倉銀行一色支店を継承。昭和 27（1952）年廃止。

長谷支店
大正 10（1921）年開設の鎌倉銀行長谷支店を継承。昭和 44（1969）年廃止。

鎌倉銀行の店頭での現金引出し時に使用されていた番号札
金属型で重厚感のあるものだった。



町田銀行・相模実業銀行・瀬谷銀行の鎌倉銀行への合同時の 引継関係書類

昭和 25（1950）年ごろの横浜興信銀行鎌倉支店
鎌倉銀行本店の建物を継承

鎌倉銀行一色支店で貴金属供出品に使われていた秤（はかり）
戦時下において、銀行は貴金属供出の窓口となっていた。

旧鎌倉銀行由比ヶ浜出張所［バー「THE BANK」］
昭和 20（1945）年閉店後も建物は残り、現在は、「THE BANK」が営業している。
「由比ヶ浜出張所」の看板の上には、当初「鎌倉銀行」の 4 文字であったものを「横浜興信銀行」の 6 文字に変更した跡が残る。

04 横浜銀行の店舗の歴史

横須賀市・三浦市

多くの銀行を受け継ぐ横須賀支店と、浦賀銀行からの歴史をもつ浦賀支店・三崎支店

国防の拠点・横須賀

横浜開港とともに、横須賀は早くから国防の拠点とされた。明治 22（1889）年に横須賀線が開業し、40 年には横浜に次いで、川崎よりも早く県内で2 番目に市制が施行。横須賀では、明治初期から早くも人口集積が始まっていた。

相次いだ支店設立

明治 32（1899）年、浦賀に当行の前身のひとつである浦賀銀行が設立されたが、横須賀市街には明治 39（1906）年に横須賀商業銀行（共信銀行に改称のうえ昭和 5（1930）年に廃業）が設立されたのみだった。

銀行本店設立が少なかった一方で、速いスピードで進んだ人口集積によって有力なマーケットと判断され、各行が競って多数の支店を設置した。明治 40（1907）年までに、藤沢銀行と藤沢貯蓄銀行（本店:藤沢）、鎌倉銀行（同鎌倉）、武相（ぶそう）貯蓄銀行（同横浜）、第二銀行（同横浜）、相模共栄銀行（同藤沢）の支店が設けられた。第二銀行の支店は、横須賀のほかは東京・高崎・前橋のみであり、横須賀は県内唯一の支店だった。

多くの銀行を受け継ぐ横須賀支店

第二銀行

当行の初代・横須賀支店は、昭和 3（1928）年、第二銀行横須賀支店を継承して、旭町（現在の本町一丁目 4 番地、在日米海軍横須賀基地入口の正面）で営業を開始した。第二銀行横須賀支店の開店は明治 36（1903）年。

藤沢銀行・相模共栄銀行 ⇒関東銀行⇒関東興信（こうしん）銀行

ともに藤沢に本店を置く藤沢銀行と相模共栄銀行が、明治 29（1896）年および38 年にそれぞれ横須賀支店を設置した。この2 行に浦賀銀行を加えた3 行が合同し、43 年に関東銀行が設立、関東銀行横須賀支店に統合される。後に横浜興信（こうしん）銀行は経営破綻した関東銀行の整理に深く関与することとなり、関東興信銀行を設立、関東興信・横浜興信両行合併により、関東興信銀行横須賀支店の営業を、既設の横浜興信銀行横須賀支店が引き継いだ。

鎌倉銀行

明治 30（1897）年に鎌倉に設立された鎌倉銀行は、32 年に横須賀支店を設置。鎌倉銀行は、昭和 16（1941）年、戦時下での「一県一行」の国策に沿う形でおこなわれた「六行合同」により、横浜興信銀行と合同する。この際、鎌倉銀行横須賀支店を継承して、横浜興信銀行大滝町支店が誕生している。

南総（なんそう）銀行⇒上総（かずさ）銀行⇒千葉合同銀行⇒千葉銀行

千葉県木更津に本店を置く南総銀行が、明治 43（1910）年に現在の横須賀支店所在地（若松町二丁目 4 番地）に横須賀支店を設置。戦前に千葉県の銀行が神奈川県に支店を設置したのは、南総銀行の横浜支店・横須賀支店の2 か店のみである。なお、横浜支店は開設後 4 年で廃止された。

その後、千葉県でも銀行の合同が進展し、南総銀行は、上総銀行、千葉合同銀行、千葉銀行と名称を変える。国策である「一県一行」は、県外支店の整理も求めるものであり、昭和 19（1944）年に千葉銀行横須賀支店は横浜興信銀行に営業譲渡され、若松町支店が誕生する。同時に、鎌倉銀行横須賀支店を継承した大滝町支店は廃止され、若松町支店に統合される。

旧若松町支店が旧横須賀支店を統合、現在の横須賀支店となる

こうして横須賀市街地には、第二銀行を継承し、関東興信銀行（当初藤沢銀行、相模共栄銀行）を統合した横須賀支店と、千葉銀行（当初 南総銀行）を継承し、大滝町支店（旧・鎌倉銀行）を統合した若松町支店の2 か店が並立することとなった。昭和 50（1975）年にそれまでの若松町支店の場所に完成した共同ビル（横須賀中央合同ビル）内に2 か店を統合し、店舗面積を拡大のうえ横須賀支店と改称して現在に至る。

浦賀銀行本支店を受け継ぐ浦賀支店・三崎支店

明治 32（1899）年に浦賀銀行が設立され、40 年に同行三崎支店が設置された。同行は、ともに藤沢に本店を置く藤沢銀行・相模共栄銀行と合同して43 年に関東銀行となり、浦賀銀行本店、三崎支店は、それぞれ関東銀行の浦賀支店、三崎支店になる。経営破綻・休業を経て、関東興信銀行の支店となった後、昭和 7（1932）年に横浜興信銀行と合併し、浦賀支店、三崎支店となって現在に至る。

浦賀銀行頭取・高橋勝七（かつしち）と現在の横須賀支店とのゆかり

浦賀銀行創立の中心人物の一人で、第 2 代頭取となり、合同後の関東銀行の初代頭取も務めた高橋勝七は、鴨居（観音崎の近く）の素封家として名高く、浦賀町長、代議士などを歴任し、現在の横須賀中央駅周辺の海面の埋め立てをおこなったことでも有名である。19 世紀に入って、たびたび日本近海で外国船を目にするようになると、幕府は会津藩に江戸湾警備の任務を命じ、鴨居に会津藩の陣屋が設けられた。高橋家はその陣屋の世話をしたため、会津若松の地名から「若松屋」と号し、その名をとって、埋め立てた土地を「若松町」と命名。その若松町で横須賀支店は現在も営業している。

このほかの横須賀市内の店舗

追浜支店

昭和 15（1940）年開設の都南（とな）貯蓄銀行追浜支店（当初は出張所）を継承し、20 年に誕生。都南貯蓄銀行から店舗を直接継承したのは、追浜・妙蓮寺の2 か店のみであるが、本店をはじめ各店でその営業を継承している。

＜戦前に誕生し、現在までに統合・廃止された店舗＞

田浦支店
明治 40（1907）年戸塚銀行船越支店⇒同田浦支店⇒昭和 3（1928）年関東興信銀行田浦支店⇒ 7 年横浜興信銀行田浦支店⇒ 47 年廃止

西浦出張所（当時の西浦村秋谷（あきや））
昭和 3（1928）年関東興信銀行西浦出張所⇒ 7 年横浜興信銀行西浦出張所⇒ 9 年廃止

逸見（へみ）出張所
昭和 3（1928）年鎌倉銀行逸見出張所⇒ 16 年横浜興信銀行逸見出張所⇒ 20 年廃止

安浦（やすうら）支店
昭和 17（1942）年新設（当初は出張所）⇒ 52 年廃止

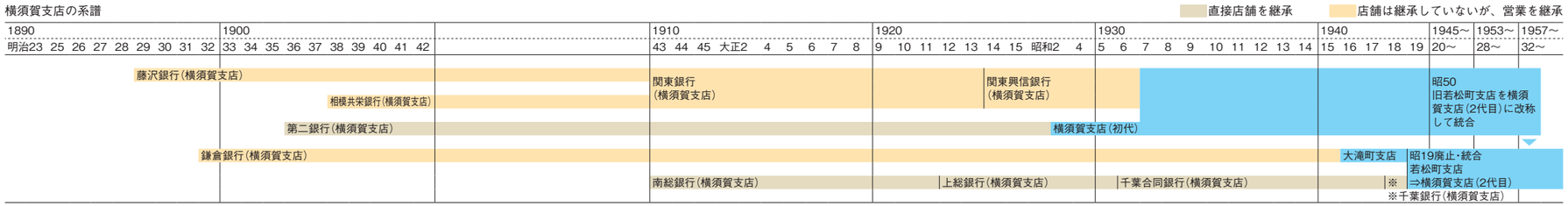
また、戦後に入ると、昭和 39（1964）年に衣笠支店（当初は出張所）、48 年に久里浜支店、52 年に馬堀支店、60 年に北久里浜支店（当初は出張所）が誕生した。なお、昭和59（1984）年に開店した野比出張所は、平成 10（1998）年に無人化のうえ、翌 11 年、日本マクドナルドと当行との共同店舗第 1 号として再出発した。

浦賀銀行設立地で営業していた頃の浦賀支店（昭和 35（1960）年撮影）

関東大震災後、再築された直後の第二銀行横須賀支店
（のちの当行初代横須賀支店）
現在の在日米海軍横須賀基地入口の正面にあたる。

千葉銀行横須賀支店を継承した横浜興信銀行若松町支店
現在の横須賀支店所在地。

横須賀支店の系譜



05 地域別店舗の歴史

町田市・多摩市・相模原市・大和市・座間市・海老名市・綾瀬市

鎌倉銀行支店を経て町田銀行本店・瀬谷銀行支店を継承する町田・橋本・上溝の各支店と戦後に地域の発展にともなって新設された大多数の店舗

「軍都」だった戦前からの発展

平坦で広大な土地をもつ相模原を中心とする地域には、戦前、現在の米軍キャンプ座間の場所に陸軍士官学校が設置されたことをはじめとして、軍事施設が集中し、「軍都」として発展した。しかし、戦時中に大きな打撃を受け、終戦後には多くが接収を受けることになり、復興が立ち遅れる。その後、日本経済の復興と接収解除が進むと、都心・京浜工業地帯への通勤圏にあたることから人口流入が始まり、高度経済成長期には飛躍的に人口が増加した。

当行店舗のみだった相模原・町田地域

現在の相模原市、町田市を中心とする広大な地域に、大正末期から昭和初期にかけて存在した銀行本支店は、明治29（1896）年設立の町田銀行本店と、瀬谷（せや）銀行の3支店（原町田（はらまちだ）支店・橋本支店・上溝支店）のみだった。町田銀行は昭和3（1928）年に鎌倉銀行と合併し、町田銀行本店は鎌倉銀行町田支店となる。瀬谷銀行も、10年に資産・負債を鎌倉銀行に譲渡し、原町田支店は鎌倉銀行町田支店に統合、橋本・上溝両支店は、鎌倉銀行の支店・出張所となった。

相模原・町田は、距離の隔たりはあるものの、鎌倉との結びつきの強い地域である。瀬谷銀行の本店所在地・瀬谷は、14年に戸塚区の一部として横浜市に編入されるまで、鎌倉郡に属しており、相模原・町田は、鎌倉街道（鎌倉古道）で瀬谷を抜けた延長線上にある。また、町田市・多摩市を含む三多摩地区は、明治26（1893）年に東京府（現在の東京都）に移管されるまでは神奈川県に属していた。そして、昭和16（1941）年の「六行合同」により、鎌倉銀行の町田・橋本・上溝（出）の各店が、横浜興信（こうしん）銀行（当行）の支店・出張所となったのである。

店舗重複地区からの配置転換

大正以前からの銀行店舗を継承した町田・橋本・上溝の3か店に加え、戦時中には、「六行合同」時に店舗重複が発生した地区からの配置転換によって、店舗空白地域に店舗が新設される。こうして、伊勢原東支店（伊勢原支店に統合）の配置転換により相模原支店（のちに名称変更し、現在の渕野辺支店）が、福沢支店（大雄山支店に統合）の配置転換により中野支店が誕生する。それでも、終戦時の当行店舗は5か店にすぎず、他行店舗も特殊銀行1店舗（神奈川県農工銀行中野支店）を除くとひとつもなかった。

急激な地域の発展に対応しながら

戦後の急激な地域の発展に対応して、当行も店舗を展開していく。終戦時に5か店だった当行店舗は、現在では29か店に達する。

＜昭和20年代　2か店＞

大和支店　昭和28（1953）年新設。
座間支店　昭和28（1953）年新設。

＜昭和30年代　2か店＞

相模大野支店　昭和38（1963）年新設。
相模原駅前支店　昭和39（1964）年新設。

＜昭和40年代　8か店＞

相模台支店
昭和41（1966）年新設。
鶴川西支店
昭和42（1967）年鶴川出張所として団地内に新設、鶴川西出張所への改称を経て、57年鶴川西支店に昇格。
相武台北支店
昭和43（1968）年相武台出張所として団地内に新設、平成18（2006）年相武台北支店に改称、支店昇格。
南海老名支店
昭和45（1970）年海老名出張所として新設、53年南海老名支店に改称、支店昇格。
南林間支店
昭和45（1970）年新設。
さがみ野支店
昭和46（1971）年大塚本町支店として座間市（当初は座間町）に新設、55年海老名市に移転、改称。
つくし野支店
昭和46（1971）年新設。つくし野駅開業は43年。47年まで田園都市線の終点だった。
鶴川支店
昭和48（1973）年新設。

＜昭和50年代　5か店＞

綾瀬支店
昭和55（1980）年忠実屋綾瀬店（現・ダイエー）開店時に新設。
成瀬支店
昭和55（1980）年新設。前年の新駅設置に対応。
海老名支店
昭和56（1981）年新設。
中央林間支店
昭和58（1983）年新設。翌年の田園都市線延伸に対応。
高座渋谷支店
昭和58（1983）年に出張所として新設、平成18（2006）年支店昇格。

＜昭和60年代以降　7か店＞

座間駅前支店
昭和60（1985）年新設。
古淵支店
平成6（1994）年新設。駅新設（昭和63（1988）年）後の地域発展に対応。
相模原市役所出張所
平成11（1999）年市役所派出の昇格により新設。
大和オークシティ出張所
平成13（2001）年、旧・車体工業の工場跡地に出店したショッピングセンター内にインストアブランチとして新設。
東林間支店
平成15（2003）年個人特化型店舗として新設。
桜ヶ丘支店
平成15（2003）年個人特化型店舗として新設。
多摩センター支店
平成19（2007）年新設。

＜廃止店舗＞

廃止店舗が少ないことも、同地域の特徴といえる。

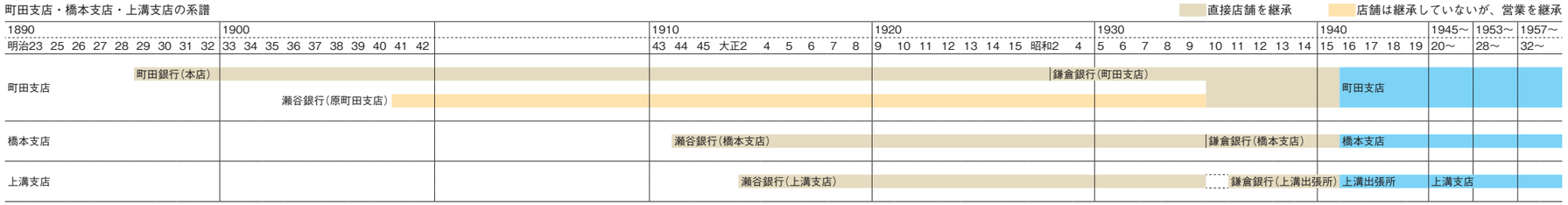
与瀬（よせ）支店
昭和20（1945）年に出張所として新設され、25年12月16日の当行創立30周年記念日に他の9出張所・詰所とともに支店昇格するも、31年に廃止。当時の与瀬駅（現在の相模湖駅）の駅前にあった。

多摩支店
昭和51（1976）年に新設されたが、62年に府中分倍河原支店とともに富士銀行に営業譲渡された。富士銀行の無人化により、現在はみずほ銀行のATMが残っている。
玉川学園出張所
昭和59（1984）年に玉川学園駅前に新設されたが、平成9（1997）年に廃止された。

当行店舗の設置時期

行政区画（市制施行年）	相模原（S29）	町田（S33）	大和（S34）	座間（S46）	海老名（S46）	多摩（S46）	綾瀬（S53）	店舗数
大正以前からの継承店舗	橋本・上溝	町田						3
戦中に配置転換により新設	渕野辺・中野							2
S20年代新設			大和	座間				2
S30年代新設	相模大野 相模原駅前							2
S40年代新設	相武台北	鶴川西・つくし野・鶴川	南林間	相模台	南海老名 さがみ野			8
S50年代新設		成瀬	高座渋谷 中央林間		海老名		綾瀬	5
S60以降新設	古淵・相模原市役所（出）・東林間		大和オークシティ（出）・桜ヶ丘	座間駅前		多摩センター		7
店舗数	10	5	6	3	3	1	1	29
これまでに廃止	与瀬	玉川学園（出）				多摩		(3)

町田支店・橋本支店・上溝支店の系譜



06 横浜銀行の店舗の歴史

藤沢市東部

明治 25（1892）年の藤沢銀行設立から 120 年近い歴史を刻む

門前町・宿場町としての発展

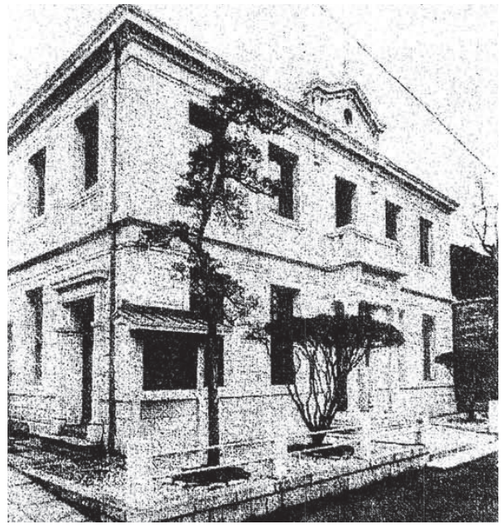
鎌倉時代に時宗の本山として遊行寺が開山して以来、藤沢はその門前町として開け、江戸時代に入ると、東海道の宿場町としても発展する。箱根駅伝復路・8 区のランナーが難所・遊行寺の坂に挑み始める藤沢橋交差点から、北西方向、小田急線藤沢本町駅に至るまでの間が、藤沢宿の中心的な区域だった。明治 20（1887）年に東海道線が国府津まで開通し、藤沢駅が開業したが、駅は約 1 km 南の町はずれに設置された。

藤沢銀行、相模共栄銀行の設立

宿場町の中心の東側、現在の藤沢橋交差点の近くに、明治 25（1892）年、藤沢銀行が誕生する。また、32 年には、藤沢銀行より約 300m 西に相模共栄銀行が誕生。藤沢銀行は大磯・横須賀・腰越に、相模共栄銀行は横須賀と長井（横須賀市）に支店を設置した。

藤沢銀行・相模共栄銀行に浦賀銀行を加えた 3 行の合同により、明治 43（1910）年に関東銀行が設立される。合同後の関東銀行の初代頭取には、浦賀銀行頭取であった高橋勝七が就任し、大正 5（1916）年からは、相模共栄銀行頭取であった廣瀬藤右衛門が 2 代目頭取となる。

関東銀行が設立された結果、藤沢銀行本店は関東銀行本店、相模共栄銀行本店は関東銀行藤沢支店となる。しかし、関東大震災の影響を受けて大正 13（1924）年に同行が経営破綻・休業すると、藤沢市街地で営業する銀行店舗は、明治 43（1910）年に進出していた駿河銀行（現・スルガ銀行）藤沢支店のみという事態が生じた。



明治 43（1910）年開業当初の関東銀行本店
「ニュースは語る 20 世紀の藤沢」より

関東興信銀行による整理受託、横浜興信銀行との合併

県知事の要請を受けて、横浜興信銀行（当行）が関東銀行の整理に深く関与、整理銀行である関東興信銀行が設立され、相模共栄銀行本店であった関東銀行藤沢支店は、関東興信銀行本店に統合。整理に目処が立った昭和 7（1932）年には、関東興信銀行と横浜興信銀行は合併し、関東興信銀行本店を、横浜興信銀行藤沢支店（初代）として継承することとなった。

鎌倉銀行藤沢支店を継承した藤沢西支店を統合

藤沢には、鎌倉銀行も支店を設置した。昭和 16（1941）年、鎌倉銀行は、戦時下での一県一行の国策に沿う形での「六行合同」により、横浜興信銀行と合同。この際、横浜興信銀行は、地元利便を考慮して廃止店舗を出さない方針をとったため、藤沢支店から西にわずか 100m しか離れていない場所に、藤沢西支店が誕生したが、3 年後に廃止・統合している。

社員寮となった初代・藤沢支店と藤沢中央支店の開設

終戦後、藤沢駅北口の発展に対応して、昭和 22（1947）年に藤沢駅前出張所が開設され、2 年後に支店に昇格した。そして 32 年、藤沢駅前支店を藤沢支店（2 代目）に改称し、初代・藤沢支店を統合する。なおこの際、初代・藤沢支店の代替として、川崎市に御幸支店が誕生している。

明治 25（1892）年の藤沢銀行設立地である初代・藤沢支店所在地は、その後、昭和 36（1961）年からは家族寮に、平成 5（1993）年からは独身寮となった。地元銀行本店として 40 年、当行支店として 25 年、その後、当行社員寮として 50 年近い歴史を刻み、118 年経った今も、行員の生活を支え続けている。

また、昭和 47（1972）年の十字屋（現・OPA）、翌年の江ノ電百貨店（現・小田急百貨店）の出店など、藤沢駅南口の開発に対応して、49 年に藤沢中央支店を開設し、現在に至る。

戸塚銀行支店を継承する長後支店、鎌倉銀行支店を継承する片瀬支店

長後支店は、明治 38（1905）年に戸塚銀行長後支店として開店し、昭和 3（1928）年に戸塚銀行と関東興信銀行の合同により関東興信銀行長後支店となる。そして、7 年に関東興信・横浜興信両行の合併によって横浜興信銀行長後支店となり、現在に至る。

また、片瀬支店は、大正 9（1920）年に鎌倉銀行片瀬支店として開店し、昭和 16（1941）年に「六行合同」によって横浜興信銀行片瀬支店となり、現在に至る。

このほかの藤沢市東部の当行店舗

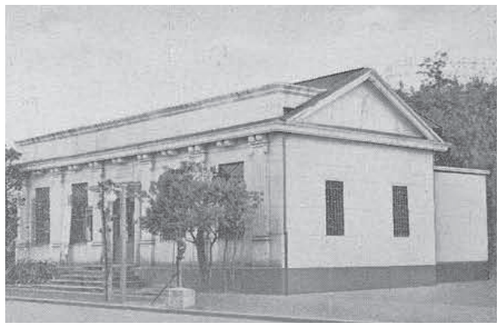
藤沢市東部には、戦後、以下の店舗が誕生し、現在も営業をおこなっている。

鵠沼支店
昭和 23（1948）年に出張員詰所として開店、当行創立 30 周年記念日（昭和 25 年）に他の 9 出張所・詰所とともに支店昇格。

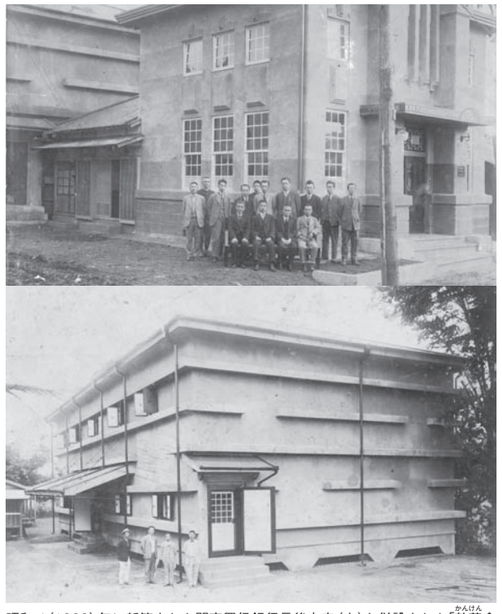
善行支店
昭和 40（1965）年、団地内に出張所として開店、平成 15（2003）年、駅前への移転と同時に支店昇格。

湘南台支店
昭和 59（1984）年開店。

明治 25（1892）年の藤沢銀行設立地に建つ横浜銀行藤沢寮

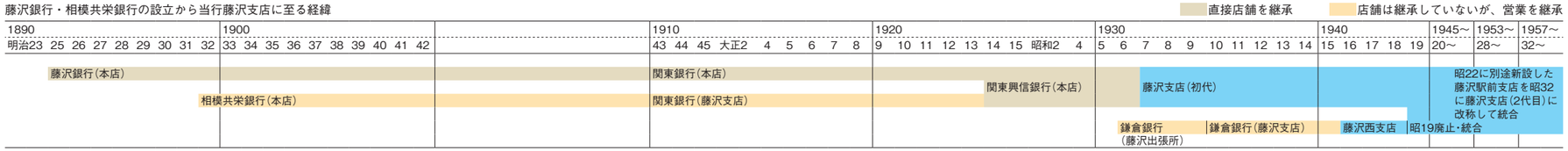


大正 14（1925）年設立の関東興信銀行本店を継承した当行藤沢支店（初代）
震災焼失後に整理受託した関東興信銀行では本店の規模を縮小せざるを得なかった。



昭和 4（1929）年に新築された関東興信銀行長後支店（上）と併設された「乾繭倉庫」（下）。

藤沢銀行・相模共栄銀行の設立から当行藤沢支店に至る経緯



07 横浜銀行の店舗の歴史

平塚市・中郡・茅ヶ崎市・藤沢市西部・寒川町

130年近い歴史をもち、しかも多数の銀行を継承している平塚支店と、110年の歴史をもつ茅ヶ崎支店、いったん廃止後再度出店した大磯支店・二宮支店

多くの銀行本店・支店があった平塚

平塚は、江戸時代から宿場町として、そして橋がなかった相模川往来の渡船場として発展し、戦前には軍需産業の集積も起こった。市制が施行されたのは昭和7(1932)年で、県内では横浜・横須賀・川崎に次いで4番目だった。

明治に入ると、明治15(1882)年に江陽銀行、29年に平塚銀行が設立された。平塚の特徴は、近隣地区に本店を置く銀行が多くの支店を設置した点にある。秦野銀行、国府津銀行(小田原実業銀行を経て明和銀行となる)が、それぞれ平塚支店を設置したほか、すでに藤沢・厚木に出店するなど、神奈川県内への進出に積極的だった駿河銀行(現・スルガ銀行)も、45年に平塚支店を開設している。

地域に求められた証

昭和7(1932)年、江陽銀行と平塚銀行が合併して、新たに平塚江陽銀行が設立された。この時点まで、江陽銀行は同一名称で50年間の営業を続けていた。これに次ぐ49年間の相模銀行・秦野銀行とともに、銀行の消長が激しい時代にあって、記録的な長さであり、地域に必要な銀行となっていたことの証といえる。県内でこれを上回るのは、横浜銀行に行名を変更して54年を経過する現在の当行のみである。

江陽銀行が明治33(1900)年に設置した茅ヶ崎支店は、平塚江陽銀行の支店を経て当行茅ヶ崎支店となった。110年の歴史を有する店舗である。

昭和16年、横浜興信銀行の支店が一気に6か店となる

銀行の合同が進展した結果、昭和16(1941)年に、当時の平塚市内(現在の平塚市のうち東南部)の銀行本支店は下表の4行・6か店に、駿河銀行平塚支店を加えた7か店となった(特殊銀行を除く)。

同年12月、このうち平塚江陽・秦野・明和の3行は、戦時下での「一県一行」の国策に沿う「六行合同」により横浜興信銀行と合同する。この際、横浜興信銀行は、地元利便を考慮して廃止店舗を出さない方針をとったため、駿河銀行の支店以外がすべて横浜興信銀行の支店となった。昭和7(1932)年の関東興信銀行との合併により、同行平塚出張所を継承して誕生していた平塚支店に加え、「六行合同」により、平塚駅前支店、平塚本宿支店、須賀支店、平塚八幡前支店、平塚新宿支店の5か店が一気に加わり、狭い範囲に6か店が集中する状況が一時的に生じることとなる。

配置転換により辻堂・湯河原・溝口・大磯の4か店が誕生

その後当行は、昭和20(1945)年までに、地元の理解を得ながら平塚支店1か店への統合を進め、平塚駅前支店を廃止したほか、他4か店は、配置転換により店舗空白地域への新規出店に充てた。この配置転換の結果、新たに誕生したのが、辻堂・湯河原・溝口・大磯(2代目、復活出店)の4か店である。

廃止後に再出店した大磯支店・二宮支店

大磯・二宮(旧吾妻村)には、明治33(1900)年に大磯銀行・吾妻銀行がそれぞれ設立され、大正6(1917)年に大磯銀行が吾妻銀行を合併。その後の関東大震災の打撃は大きく、15年に大磯銀行は経営破綻し、和議手続きをとったうえで、駿河銀行に継承されている。

大磯には、大磯銀行設立より早く、藤沢銀行が大磯支店を開設している。明治43(1910)年、藤沢・相模共栄・浦賀の3行が合同して関東銀行となった際に関東銀行大磯支店となり、関東興信銀行大磯支店を経て、昭和7(1932)年に合併によって横浜興信銀行大磯支店が誕生する。しかし、2年後に横浜興信銀行は大規模な店舗統廃合をおこない、大磯支店を廃止。残った駿河銀行大磯支店(旧大磯銀行本店)も11年に廃止されたことにより、大磯は"銀行空白地"となる。17年に、平塚新宿支店の配置転換によって、横浜興信銀行大磯支店が復活し、現在に至る。

二宮には、明治33(1900)年開業の吾妻銀行と合併した大磯銀行の二宮支店があったが、経営破綻、和議手続きを経て、大正15(1926)年に駿河銀行二宮支店となった。一方、小田原に本店を置く小田原通商銀行が8年に二宮支店を開店、小田原・国府津・曽我の3行と合併して新設した小田原実業銀行の二宮支店となり、経営破綻・休業を経て、昭和2(1927)年に明和銀行二宮支店となっていた。

昭和5(1930)年、明和銀行は、駿河銀行二宮支店の営業を譲り受け、代替として真鶴支店の営業を駿河銀行に譲渡。これにより、明和銀行二宮支店は、吾妻銀行・大磯銀行から継続する営業も継承することになった。そして16年に、「六行合同」により横浜興信銀行二宮支店が誕生し、現在に至る。

明治31(1898)年平塚駅前に移転後の江陽銀行本店。煉瓦造2階建ての洋館。(平塚市博物館 市史編さん担当提供)

このほかの平塚市、中郡、茅ヶ崎市、藤沢市西部、寒川町の店舗

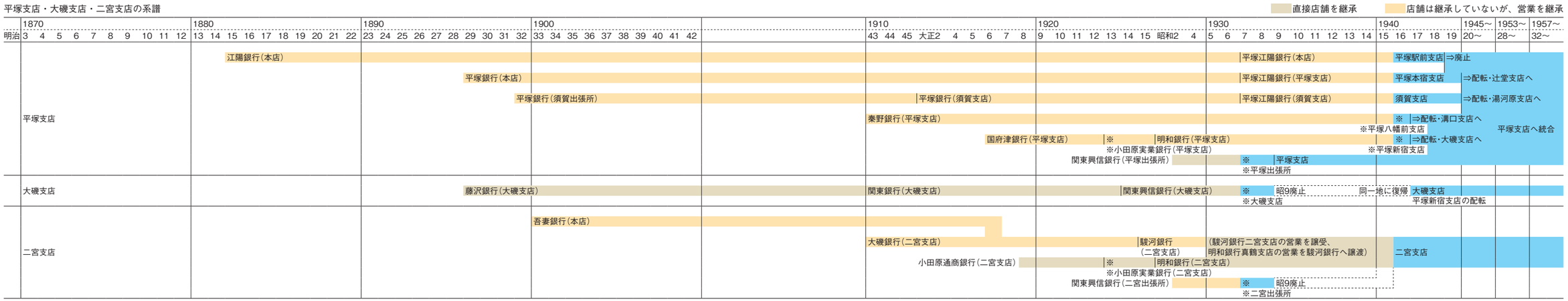
当時の金目村南金目に設置された平塚銀行金目支店(当初は出張所)を継承した金目支店は、昭和24(1949)年に廃止されている。また、昭和41(1966)年に平塚南口支店が開店したが、5年後に廃止されている。

初代・寒川支店は、秦野銀行本店を継承した秦野片町支店の配置転換により、昭和18(1943)年に誕生したが、昭和30(1955)年に廃止された。現在の寒川支店は、昭和61(1986)年に改めて設置されたものである。

このほかの開店状況は下記のとおりである。すべて現在も継続して営業している。

昭和39(1964)年　辻堂南出張所(平成18(2006)年支店に昇格)
昭和44(1969)年　二宮北出張所(平成18(2006)年支店に昇格)
昭和54(1979)年　湘南ライフタウン支店
平成15(2003)年　平塚旭支店、花水台出張所(翌年から支店に昇格)
平成16(2004)年　茅ヶ崎南口支店

平塚支店・大磯支店・二宮支店の系譜



08 横浜銀行の店舗の歴史

厚木市・愛川町・伊勢原市・秦野市

前身行から120年におよぶ歴史をもつ厚木支店、秦野支店、伊勢原支店

厚木・伊勢原・秦野に誕生した銀行本店をすべて継承

厚木は相模川の水運の拠点として、伊勢原は「大山参り」の拠点として発展を遂げた。秦野は、宝永4(1707)年の富士山大噴火により大量の火山灰が堆積し、耕作に適さない土地となったものの、やせた土地でも栽培できる葉たばこの生産を本格化し、一大産地となった。明治時代に入ってそれぞれに銀行が誕生する。

＜厚木＞　厚木会社⇒厚木株式会社⇒厚木銀行⇒相模実業銀行

明治23(1890)年、厚木会社設立。⇒厚木株式会社⇒厚木銀行となり、大正4(1915)年に相模実業銀行。

＜伊勢原＞　伊勢原銀行

明治29(1896)年、伊勢原銀行設立。

＜秦野＞　相模銀行

明治25(1892)年、相模銀行設立。届出上、当初は本店:東京、支店:秦野であったが、実質的な本店は秦野だった。14年創業の共伸社はこの前身と考えられる。

＜秦野＞　秦野銀行

明治25(1892)年、秦野銀行設立。

相模実業銀行は鎌倉銀行厚木支店を経て、伊勢原銀行は秦野銀行伊勢原支店を経て、そして相模・秦野の2行は名称を変えることなく49年間営業を継続し、昭和16(1941)年の「一県一行」の国策に沿う「六行合同」により、横浜興信銀行(当行)と合同。厚木・伊勢原・秦野に誕生した銀行の本店は、他行へ継承されたり廃業することなく、すべて当行が継承している。 厚木支店は厚木会社から120年、秦野支店は相模・秦野両行から118年、共伸社から起算すれば129年の歴史を有している。

第七十八銀行破綻による厚木経済の混乱

西秦野(現在の渋沢付近)には、秦野銀行・大磯銀行・松田銀行が支店を設置したほか、江陽銀行(本店:平塚)が伊勢原に支店を設置している。 厚木には、明治29(1896)年に、八王子に本店を置く第七十八銀行が最も早く支店を設置した。しかし、41年に経営破綻し、休業に至る。一度決定した解散が訴訟提起により破棄されるなど、混迷を深めたうえ、43年に破産が決定された。

こうした混乱のなか、同年に駿東実業銀行(明治45(1912)年駿河銀行に行名変更、現・スルガ銀行)が、神奈川県への進出1号店として、厚木支店を出店する。同年、藤沢支店を開店し、45年には平塚・小田原・吉浜(湯河原)に出店するなど、神奈川県への出店を加速した。

相模実業銀行本店・瀬谷銀行厚木支店を受け継ぐ厚木支店

昭和16(1941)年の「六行合同」により、鎌倉銀行厚木支店を継承して横浜興信銀行厚木支店が誕生した。 鎌倉銀行は、昭和5(1930)年に、明治23(1890)年開業の厚木会社を起源とする相模実業銀行と合併し、新・鎌倉銀行を設立してその厚木支店としていた。そして、昭和10(1935)年に瀬谷銀行の営業譲渡を受けた際、鎌倉銀行厚木支店で瀬谷銀行厚木支店の営業を引き継ぐ。鎌倉銀行厚木支店を継承した当行厚木支店は、相模実業銀行本店・瀬谷銀行厚木支店の双方を受け継いでいる。

伊勢原と秦野にそれぞれ2支店誕生

昭和16(1941)年の「六行合同」にあたり、横浜興信銀行は、地元利便を考慮して廃止店舗を出さない方針をとったため、伊勢原と秦野にそれぞれ2か店が同時に誕生した。

伊勢原では、伊勢原銀行本店を起源とする秦野銀行伊勢原支店を継承して伊勢原支店が、江陽銀行伊勢原支店を起源とする平塚江陽銀行伊勢原支店を継承して伊勢原東支店がそれぞれ誕生。伊勢原支店に統合のうえ、伊勢原東支店の配置転換により相模原支店(のちに名称変更し、現在の渕野辺支店)が誕生している。

秦野では、相模銀行本店を継承して秦野支店が、秦野銀行本店を継承して秦野片町支店が誕生する。秦野支店に統合のうえ、秦野片町支店の配置転換により寒川支店が誕生するが、昭和30(1955)年に廃止となる。現在の寒川支店は、昭和61(1986)年に改めて設置されたものである。

このほかの厚木市、愛川町、伊勢原市、秦野市の店舗

愛川町では、昭和20(1945)年に、江戸時代から続く伝統産業・半原撚糸の産地である半原に出張所を開店、22年に半原支店に昇格した。その後、陸軍の飛行場跡地に新たに造成された内陸工業団地(中津工業団地)の近くに、53年に愛川支店を開設、その翌年、半原支店を廃止する。

昭和56(1981)～62(1987)年の間、伊勢原支店を拠点とする高森・毛利台地区移動出張所があったが、62年に愛甲石田支店が設置されたことにより、その役割を終えた。また、昭和57(1982)年に開設された南が丘出張所は、平成8(1996)年に廃止となった。

このほかの開店状況は以下のとおりであり、すべて現在も継続して営業している。

昭和40(1965)年　緑ヶ丘出張所(平成18(2006)年支店に昇格)
昭和51(1976)年　渋沢支店
昭和53(1978)年　大根支店(東海大学駅前支店に改称)
昭和60(1985)年　森の里出張所(平成18(2006)年支店に昇格)

明治十四年一月　大阪銀行通信録百三十二號

●八王子第七十八銀行厚木支店の失態

曩に支拂を停止したる八王子第七十八銀行厚本支店に於ては百圓以上の預金者に對し八月三十一日迄に一割方の拂戻を爲すべき旨通知を發し置きながら當日に至り支店主任兼務たる取締役中丸重郎兵衛氏役員改選の結果再選せられたるも就任を拒み其儘旅行不在中なるの故を以て拂戻を肯んぜざるより預金者大に激昂し紛擾の央支配人高橋満次郎氏亦辭表を提出して出勤せず且つ有體動産を始め諸帳簿類は預金者の出訴に依り本店と共に差押の處分を受け倉庫は封印附きとなりし爲め目下表面開店は爲し居るものゝ營業出來ず殆ど支拂停止中と同樣の姿なりと云ふ

●信濃銀行の整理決定

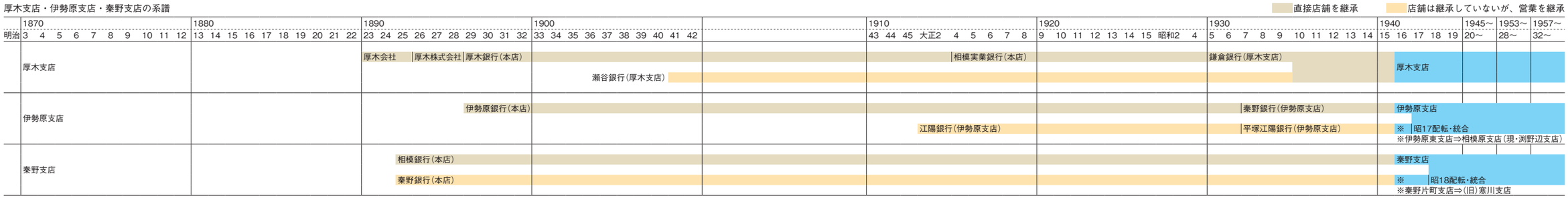
曩に信州信濃銀行整理に關し同行重役は安田家に交渉の結果缺損額を六拾參萬五千圓と査定し右整理方法として減資を決行することに内決し兩者の協定成りたるを以て七月三十日株主總會を開き右協定案を提出したるに反對論盛にして決議に至らず遂に株主中より調査委員十一名を選出して再調査中なりしが八月十七日の臨時總會に於て最初の原案大多數を以て通過し結局元資百參拾萬圓(一株參拾圓拂込)の四株を一株

第七十八銀行厚木支店の支払停止にともなう厚木地区の経済混乱を伝える「大阪銀行通信録」(明治41年9月発行 第132号)の記事

昭和35(1960)年の伊勢原支店
伊勢原銀行本店、秦野銀行伊勢原支店であった建物。

昭和25(1950)年ごろの横浜興信銀行秦野支店
相模銀行本店の建物を継承。

厚木支店・伊勢原支店・秦野支店の系譜



09 横浜銀行の店舗の歴史

小田原市

明治 8（1875）年から 135 年の歴史をもつ小田原支店

足柄県の県庁所在地だった小田原

小田原は、江戸時代から城下町、宿場町として発展し、経済活動が活発だった。明治 4（1871）年から 9 年までは、相模国の相模川西側と伊豆国の地域に足柄県が置かれ、小田原はその県庁所在地であった。8 年、小田原宿の駅（うまや）の商人が中心となって積小社（26 年より小田原銀行）が設立される。栢山に生まれた農政家・二宮尊徳の教えである「積小為大」（大事をなさむと欲せば、小なる事を怠らず勤むべし。小積もりて大となればなり）から命名され、現在の神奈川県域では、明治 2（1869）年設立の横浜為替会社に次いで 2 番目に設立された金融機関である。

士族授産による第四十四国立銀行小田原支店とその経営の行き詰まり

明治 11（1878）年には、第四十四国立銀行（本店：東京）の小田原支店が設置される。明治政府は、士族に対する秩禄を廃止する一方、士族授産*を進め、士族に交付した秩禄公債を国立銀行の資本金に充てることを認めた。小田原城下の士族は、第四十四国立銀行に出資し、支店設置を実現。しかし、その経営は数年で行き詰まり、15 年、第三国立銀行横浜支店に吸収合併され、士族上層は負債整理のため家屋敷を失うことになったと伝えられている。（「小田原市史」より）

＊　江戸時代、士族は幕府および藩から、現在の公務員給与にあたる「秩禄（ちつろく）」を得ていた。明治政府は、これを廃止する一方、士族に生業を与えようとした。これを「士族授産」という。

現在の小田原市域に設立された銀行

積小社（のちの小田原銀行）のほか、現在の小田原市域には、以下の銀行が設立された。

明治 30（1897）年　小田原通商銀行（幸町、現在の中央労働金庫小田原支店所在地）
明治 30（1897）年　足柄銀行（二川村、現在の小田原市北部）
明治 32（1899）年　桜井共益銀行（桜井村、現在の栢山付近）
明治 33（1900）年　国府津銀行（国府津）
明治 34（1901）年　曽我銀行（下曽我）

これらの銀行のうち、小田原・小田原通商・国府津・曽我の 4 行が大正 13（1924）年に合同して小田原実業銀行が誕生するが、翌 14 年に経営破綻・休業する。震災の影響による各行の経営悪化が促した合同であり、4 行合同時の資産査定が不十分であったとも伝えられている。昭和 2（1927）年、2 年間におよぶ休業を経て川崎財閥系の明和銀行が新設され、整理受託することとなる。明和銀行は 16 年に横浜興信銀行と合同した。

なお、足柄銀行は、伊豆銀行を経て、現在の静岡銀行に継承される。桜井共益銀行は、松田銀行と合併し、松田銀行はその後、駿河銀行（現・スルガ銀行）と合併している。

支店設立が相次いだ小田原中心市街地

小田原の中心市街地には、震災直前の大正 12（1923）年の時点で、地元・小田原銀行の 2 支店をはじめ、近隣の足柄、大磯、国府津の各行などの 11 の銀行支店があった。静岡県からの支店進出が見られたことも、小田原地方の特徴だった。このほか、神奈川県内の貯蓄銀行が合同して 10 年に設立された都南貯蓄銀行（本店：横浜）の支店も設置された。

多くの銀行を受け継ぐ小田原支店

横浜興信銀行（当行）の初代・小田原支店は、昭和 7（1932）年に関東興信銀行との合併により誕生した。当初、明治 43（1910）年に関東銀行小田原支店として小田原町幸町に設置され、経営破綻・休業を経て大正 14（1925）年から関東興信銀行小田原支店となっていた。一方、昭和 16（1941）年の「六行合同」により、明和銀行本店を継承し、2 代目である現在の小田原支店が誕生。この時、初代の小田原支店は小田原幸町支店と改称し、その後、市北部に移転して、足柄支店⇒小田原北支店となって、49 年に小田原支店が現在地に移転・拡張する際に統合された。

当行小田原支店は、積小社（のちの小田原銀行）の本店と市街地の幸町・緑町の 2 支店、小田原通商銀行の本店、国府津銀行と関東銀行の各小田原支店を受け継いでいる。

国府津支店と、8 か月だけ存在した国府津西支店

昭和 16（1941）年の「六行合同」にあたり、横浜興信銀行は、地元利便を考慮して廃止店舗を出さない方針をとったため、国府津には 2 か店が同時に誕生した。明治 33（1900）年設立の国府津銀行本店を起源とする明和銀行国府津支店を継承した国府津支店と、28 年以前に江陽銀行（本店：平塚）の出張所として設置されてからの歴史をもつ平塚江陽銀行国府津支店を継承した国府津西支店である。国府津西支店は 8 か月のみの営業期間で国府津支店に統合された。

金田興業銀行の支店を起源とする下曽我支店

明治 31（1898）年、足柄上郡金田村（現在の大井町）に設立された金田興業銀行は、大正 12（1923）年に下曽我支店を設置した。足柄農商銀行と合同ののち、昭和 16（1941）年、「六行合同」により横浜興信銀行下曽我支店となった。一方、明治 34（1901）年に下曽我に設立された曽我銀行本店は、小田原・小田原通商・国府津の 3 行と合同して小田原実業銀行下曽我支店となり、経営破綻・休業を経て明和銀行下曽我支店となるが、「六行合同」に先立ち、昭和 10（1935）年に廃止された。

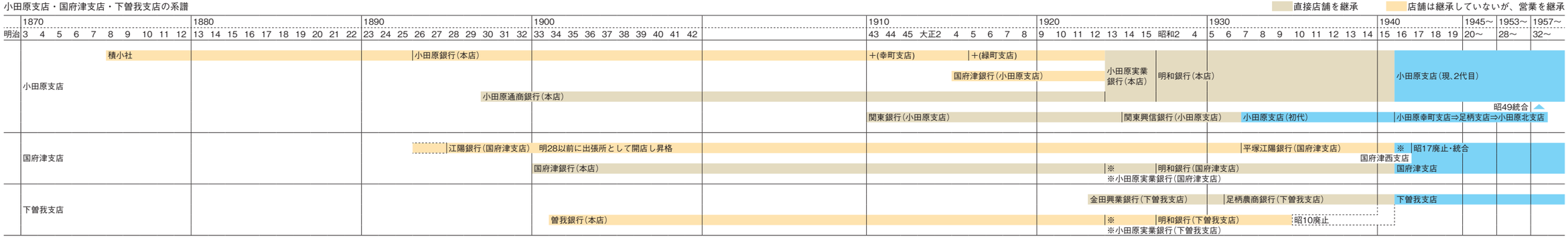
また、昭和 16（1941）年には、3 年に設置された明和銀行緑町出張所を継承して、横浜興信銀行緑町出張所が誕生している。同出張所は、19 年の強制疎開*により閉店。当行の店舗で強制疎開の対象となったのは、緑町出張所と材木座支店（鎌倉市）の 2 か店であった。

＊　「強制疎開」
「疎開」というと、学童疎開をまずイメージするが、建物の「強制疎開」というものがあった。これは、太平洋戦争末期に防空対策として、行政命令により強制的におこなわれた建物の撤去のことで、建物を間引きして焼夷弾攻撃による延焼を最小限にとどめ、住民が避難できるよう、過密地帯の建物を一部取り壊す措置がとられた。横浜興信銀行（当行）の店舗で「強制疎開」の対象となったのは、材木座支店と緑町出張所（小田原市）の 2 か店だった。

なお現在の小田原市域には、このほか、昭和 60（1985）年に鴨宮支店が誕生している。

旧明和銀行本店（現中央労働金庫小田原支店）
明和銀行本店として昭和 3（1928）年に建てられた。昭和 16（1941）年横浜興信銀行小田原支店（2 代目）となり、昭和 49（1974）年に移転するまで当行小田原支店。

小田原支店・国府津支店・下曽我支店の系譜



10 地域別の店舗の歴史

南足柄市・足柄上郡・足柄下郡・熱海市

戦前期、足柄上郡（現在の南足柄市を含む）には9行もの銀行本店が設立された

銀行本店の多数設立

明治期、足柄上郡（現在の南足柄市を含む）には9行もの銀行本店が設立された。横浜を除く県下他地域と比べると、きわめて多い数である。明治22（1889）年に、東海道線が山北・御殿場経由で全通し、交通の要衝として急速に発展したことが、銀行設立を促進する要因になったと考えられる。

明治14（1881）年　共洽株式会社（南足柄市）⇒共洽銀行に改称
明治16（1883）年　株式共益会社（開成町、当時の吉田島村）⇒相陽銀行に改称
明治29（1896）年　積塵株式会社（山北町）⇒川村銀行に改称
明治29（1896）年　松田銀行（松田町）
明治30（1897）年　酒田銀行（開成町、当時の酒田村）
明治31（1898）年　金田興業銀行（大井町、当時の金田村）
明治33（1900）年　足柄農商銀行（南足柄市⇒のちに山北町に本店移転）
明治33（1900）年　鞠子銀行（山北町谷峨、当時の谷ヶ村）
明治33（1900）年　寄銀行（松田町北部、当時の寄村）

このほか、京都で第七十国立銀行として設立され、東京に移転・改称した大雄銀行が、明治43（1910）年から2年間、現在の南足柄市に本店を置いていた。同行はその後、栃木に転出して黒羽商業銀行と改称し、現在の足利銀行の前身行のひとつとなっている。

上記の銀行のうち、共洽銀行、酒田銀行、鞠子銀行は、現在の小田原市栢山付近（当時の桜井村）に設立された桜井共益銀行とともに、松田銀行と合併し、松田銀行はその後、駿河銀行（現・スルガ銀行）と合併している。

また、川村銀行と金田興業銀行は、足柄農商銀行と合併した。なお、足柄農商銀行は、川村銀行との合併と同時に、本店を南足柄から山北に移転している。同行は、昭和16（1941）年の「六行合同」により、横浜興信銀行（当行）と合同した。また、相陽銀行は、東京に転出して日本昼夜貯蓄銀行と改称し、その後、浅野昼夜貯蓄銀行⇒安田貯蓄銀行⇒日本貯蓄銀行⇒協和銀行⇒協和埼玉銀行⇒あさひ銀行⇒りそな銀行と変遷。寄銀行は東京に移転後、改称を繰り返し、昭和5（1930）年に廃業している。

支店設置の少なかった足柄上郡

一方、同地域に支店の設置は少なく、郡内に本店を置く銀行が近隣に支店を設置したほかは、大磯銀行が現在の中井町に岡本支店を設置した程度だった。

横浜興信銀行（当行）の松田支店・山北支店・大雄山支店は、いずれも昭和16（1941）年に「六行合同」により足柄農商銀行の本支店を継承して誕生している。松田支店は、当初、金田興業銀行松田支店として誕生し、足柄農商銀行松田支店を経て、当行松田支店となる。山北には当初、積塵株式会社として設立された川村銀行本店と、現在の南足柄市（当時の福沢村）に本店のあった足柄農商銀行の山北支店とがあり、足柄農商銀行が川村銀行を合併し、同時に山北に本店を移した足柄農商銀行本店を継承して、当行山北支店が誕生した。

また、南足柄市域には、飯沢支店と福沢支店の2か店が同時に誕生している。飯沢支店は、足柄農商銀行飯沢支店を継承し、大雄山支店に改称して現在に至る。一方、福沢支店は、当初の足柄農商銀行本店であり、山北に本店移転後は同行の福沢支店となった。福沢支店は、昭和20（1945）年に大雄山支店と統合され、配置転換により、店舗空白地域であった津久井郡に中野支店が誕生している。

このほかの足柄上郡の当行店舗、開成支店の新設

昭和16（1941）年、足柄農商銀行北足柄出張所を継承して北足柄出張所が誕生しているが、19年に廃止されている。足柄上郡（現在の南足柄市を含む）では、戦後長らく店舗の異動はなかったが、平成20（2008）年になって開成町・小田急線開成駅前に開成支店が誕生している。開成町には、小田急線が通っていても駅がなかったが、地元の熱心な招致活動により、昭和60（1985）年に開成駅が開業する。小田急小田原線の駅は、ほとんどが昭和2年の開業時に設けられたものであり、開成のほかに戦後に開設されたのは、螢田・百合ヶ丘・新百合ヶ丘の3駅のみである。駅開業後、住宅開発が加速し、開成町は最近では神奈川県西部で唯一、人口増加が顕著な自治体として発展を遂げている。

足柄下郡の戦前の本支店

足柄下郡（現在の箱根町・真鶴町・湯河原町）に設立された銀行は、吉浜銀行（明治31（1898）年）の1行のみだった。同行は、大正2（1913）年に駿河銀行に営業譲渡する。

一方、同地域には多くの支店が設置された。国府津銀行は湯本と真鶴に支店を設置。小田原・小田原通商・曽我の3行と合同後の小田原実業銀行、その整理を受託した明和銀行へと引き継がれるが、明和銀行真鶴支店は、昭和5（1930）年に二宮支店譲受の代替として駿河銀行に譲渡され、湯本支店は10年に廃止された。とくに目立ったのは駿河銀行の進出で、真鶴、湯河原、吉浜、宮ノ下などに支店が設置されている。

足柄下郡の当行店舗

現在、湯河原支店と箱根湯本支店の2か店が営業している。

湯河原支店
昭和20（1945）年、平塚市の須賀支店の配置転換により誕生。

箱根湯本支店
昭和22（1947）年、出張所として誕生、支店昇格し現在に至る。

＜廃止店舗＞

宮ノ下出張所
昭和7（1932）年、関東興信銀行との合併により、3年開設の関東興信銀行宮ノ下出張所を継承して誕生。9年に廃止。

強羅支店
昭和20（1945）年に出張所として開設され、支店昇格するも、27年に廃止。

真鶴出張所
昭和21（1946）年開設、26年廃止。

また、湯河原から県境を越えた静岡県熱海市に昭和27（1952）年に熱海支店を開設し、20年以上にわたり営業していたが、50年に廃止している。

昭和35（1960）年の熱海支店

昭和35（1960）年の山北支店
足柄農商銀行本店の建物を継承。山北支店は現在も同一地で営業。

足柄農商銀行の本支店を継承する当行の松田支店・山北支店・大雄山支店

直接店舗を継承　店舗は継承していないが、営業を継承

	1890 明治23 25 26 27 28 29 30 31 32	1900 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42	1910 43 44 45 大正2 4 5 6 7 8	1920 9 10 11 12 13 14 15 昭和2 4	1930 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14	1940 15 16 17 18 19	1945～ 20～	1953～ 28～	1957～ 32～
松田支店		金田興業銀行（松田支店）	足柄農商銀行（松田支店）			松田支店			
山北支店	積塵株式会社	川村銀行（本店） 足柄農商銀行（山北支店）	足柄農商銀行（本店）	本店移転		山北支店			
大雄山支店		足柄農商銀行（本店）	足柄農商銀行（福沢支店） 足柄農商銀行（飯沢支店）	本店移転		福沢支店 飯沢支店	昭20配転・統合 昭20大雄山支店に改称		⇒中野支店へ
			足柄農商銀行（飯沢出張所）						

11 横浜銀行の店舗の歴史

群馬県

国立銀行から130年以上の歴史をもつ高崎支店・前橋支店

群馬県と当行の関係は明治初期にまでさかのぼる

当行は、群馬県に高崎・前橋・桐生の3か店をもつ。群馬県と当行の関係は、横浜興信銀行設立以前、明治初期にまでさかのぼる。

高崎支店は、七十四銀行高崎支店の店舗を継承して、大正9(1920)年の横浜興信銀行設立と同時に誕生した店舗のひとつである。七十四銀行高崎支店は、明治17(1884)年の第七十四国立銀行高崎支店開設を起源としている。明治11(1878)年に横浜で設立された第七十四国立銀行は、第二国立銀行とともに、生糸売込商を中心とする横浜商人のための銀行であり、生糸産地である群馬県、とくに貿易港横浜とを結ぶ交易の拠点・高崎への出店は、膨大な代金決済のためにも必要不可欠だった。28年、茂木家はみずからの事業のための機関銀行として、茂木銀行を別途設立し、その翌年には、第七十四国立銀行高崎支店を茂木銀行の高崎支店に改める。なお、国立銀行の営業満期到来により、第七十四国立銀行は横浜七十四銀行と改称した。

第一次世界大戦期の好況を機に、茂木家は積極的に事業を拡大し、その旺盛な資金需要に応えるため、大正7(1918)年に、横浜七十四銀行を七十四銀行に改称のうえ茂木銀行と合併。しかし大戦後の反動恐慌の影響を受け、9年に七十四銀行は経営破綻・休業に至る。この休業は、横浜だけでなく、群馬県にも大きな混乱をもたらした。そして、同年末に横浜興信銀行が設立され、七十四銀行整理を受託し、横浜興信銀行高崎支店として営業が再開されることとなったのである。

また、高崎支店は、第二国立銀行高崎支店として明治8(1875)年に開設された第二銀行高崎支店の営業を、昭和3(1928)年に継承している。群馬県に本店を置く第三十九国立銀行(前橋)、第四十国立銀行(館林)の誕生はともに明治11(1878)年のことであり、第二国立銀行高崎支店は現在の群馬県で最初の銀行だった。高崎支店の歴史は135年に達し、横浜為替会社から141年継続する本店営業部に次ぎ、小田原支店と並ぶ長さである。

前橋支店は、昭和3(1928)年に第二銀行前橋支店の営業を継承して誕生した。その起源は、明治9(1876)年の第二国立銀行前橋支店開設にさかのぼり、同支店は高崎支店に次ぐ134年の歴史を有している。

現在の桐生支店は、昭和22(1947)年に出張所として開店し、24年に支店に昇格したものであるが、明治期には、第二国立銀行・第二銀行が桐生支店を設置していた時期がある。

群馬県と当行とをつなぐ先人たち

当行の草創期には、群馬県とゆかりの深い多くの先人たちの活躍があった。

茂木 惣兵衛　(初代) 1827(文政10) ～ 1894(明治27)年

高崎出身。横浜の生糸売込商野澤屋の求めによって横浜に出てその業を助けた。当主の死去によって廃店となった野澤屋(その後の横浜松坂屋)ののれんを継いで独立し、売込商となり、原 善三郎と並ぶ横浜商人の中心人物の一人となった。また、財界人としても、横浜為替会社発起人、第二国立銀行副頭取、第七十四国立銀行頭取などを務めた。

原 善三郎　1827(文政10) ～ 1899(明治32)年

群馬県鬼石(現在の藤岡市)に隣接する埼玉県渡瀬村(現在の神川町)の出身。外国人との貿易の有望性を見通して、横浜に生糸売込商「亀屋」を開業し、当地有数の売込商に成長した。横浜為替会社を改組した第二国立銀行の初代頭取に就いたほか、横浜の商法会議所頭取、蚕糸業組合頭取を歴任し、貴族院議員に列するなど、横浜の中心人物として活躍した。

伏島 近蔵　1837(天保8) ～ 1901(明治34)年

群馬県藪塚村(現在の太田市)出身。横浜に移って、生糸・茶・漆器などの輸出を手がけた。茂木 惣兵衛などとともに第七十四国立銀行を創立して、その初代頭取を務めた。のちに横浜関外の埋立事業を興して新市街の発展に尽力した。

山田 昌吉　1876(明治9) ～ 1944(昭和19)年

高崎商業会議所の初期の中心メンバーのひとりであり、明治・大正・昭和と高崎の産業界で中心的な役割を担った。茂木銀行の高崎支店長を務め、大正9(1920)年の横浜興信銀行設立に際し、初代高崎支店長となったほか、のちに監査役も務めた。自邸跡に昭和49(1974)年に創設された山田文庫(高崎市常盤町)には、茂木銀行高崎支店から移築されたと伝えられるレンガ塀がある。

斎藤 虎五郎　1878(明治11) ～ 1976(昭和51)年

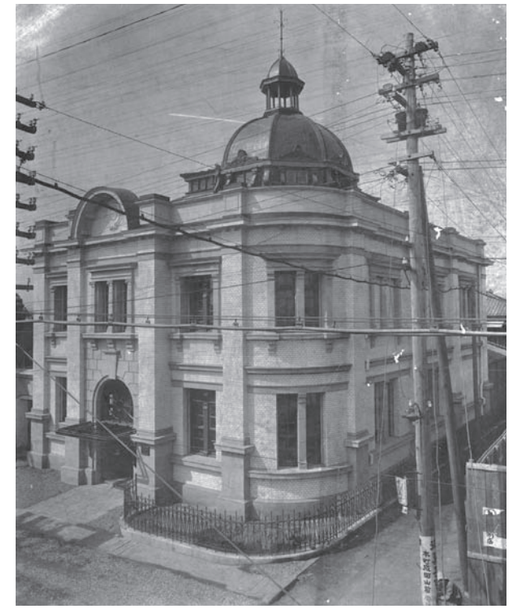
群馬県赤堀村香林(現在の伊勢崎市)出身。日本銀行調査役の職にあったが、横浜興信銀行設立に際し、井上準之助日銀総裁から推され、大正10(1921)年、専務取締役に就任した。設立から10年後、昭和5(1930)年に七十四銀行の第2次整理を成し遂げ、翌年、専務取締役を退任。7年から11年まで、郷里の群馬県内の銀行が合同した群馬大同銀行(現・群馬銀行)の2代目頭取(合同後では実質初代頭取)を務めた。 群馬大同銀行退任後、再び横浜に居を構え、当行OBで組織する「横浜銀行行友会」の前身である興信懇話会の設立に参画して会長を務め、社内報「浜銀ニュース」への寄稿を続けるなど、当行へのエールを送り続けた。

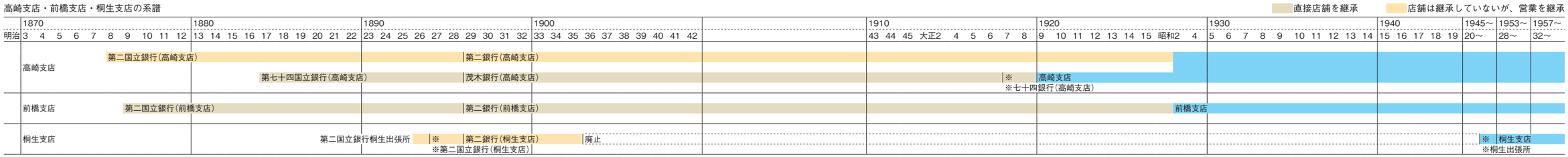
富岡製糸場を取得、経営していた原合名会社

第二銀行頭取を務め、横浜興信銀行(当行)初代頭取となる原 富太郎は、明治32(1899年)、善三郎死去により、32歳で原家の事業を引き継ぎ、翌年には原合名会社を設立、事業を家業から会社組織に改め、35年に三井家から他の製糸場とともに富岡製糸場を取得する。すでに横浜の生糸売込商として確固たる地位を築いていた原家は、製糸業にその事業を拡張し、製造・流通・金融・販売(輸出)の全工程を掌握することとなった。

昭和14(1939)年に、原合名会社から片倉製糸紡績会社(片倉工業)の所有に移った富岡製糸場は、昭和62(1987)年まで、官営工場としての操業開始から約115年間にわたって操業を続けた。現在、群馬県・富岡市を中心に世界遺産登録への取組みが進められている。

七十四銀行高崎支店・横浜興信銀行高崎支店の看板
大正7(1918)年、横浜七十四銀行の改称、茂木銀行との合併により、七十四銀行が誕生したが、大正9(1920)年5月に経営破綻・休業する。そして、同年12月、横浜興信銀行(当行)が設立され、七十四銀行の整理を受託する。
「七十四銀行高崎支店」の看板は、わずか2年で「横浜興信銀行高崎支店」の看板に代わることとなった。横浜・東京の店舗は、横浜興信銀行設立3年後の関東大震災によりすべて焼失したため、震災以前の看板が残っていない(唯一川崎支店はかろうじて震災での焼失は免れたが、その後戦災で焼失し看板は残っていない)。被害を免れた高崎支店の看板だけが残った。



茂木銀行高崎支店　高崎市九蔵町20番地
明治17(1884)年、群馬県・高崎九蔵町に第七十四国立銀行高崎支店が開店した。生糸産地である群馬県、特に貿易港横浜とを結ぶ交易の拠点・高崎への出店は、膨大な代金決済のためにも必要不可欠であった。写真は、明治29(1896)年に茂木銀行高崎支店となってから新築した建物。
七十四銀行高崎支店を経て、大正9(1920)年、横浜興信銀行高崎支店となり、横浜銀行に行名変更後の昭和33(1958)年まで使用された。

高崎支店・前橋支店・桐生支店の系譜